金魚　1

楽雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金魚　１

【Ｎコード】
Ｎ１５６８Ｄ

【作者名】
楽雨

【あらすじ】
夏休み、姉の座るべき椅子に座っていたのは、偽大阪弁の巨大金魚だった。

まず、私の姉、朝美について話そう。そいつは私と同じ顔で同じ日に生まれた。まぁ双子ってやつである。なんにでも手を出し、きっちり片付けるという私とは逆の性格をもっている。

夏休みの初日、私はのんびりと目を覚ました。背伸びをしてベッドをでる。二段ベッドの上に朝美はいなかった。もう起きたのか。いや、１２時じゃしょうがないか、とダイニングへ向かう。すでにテーブルには昼ごはんがあった。母と朝美も今から食事のようだ。

「もう、あんたは！朝美は夏休みでもしっかり起きたわよ！」

そんな母の小言を無視して席に座った。じゃあお母様、あなたもしっかり素麺以外の昼食をつくってください。

ちゅるちゅると冷たさを味わってようやく目が覚め、私は気づいた。前の席に座っているのは朝美ではない。　なんか。そう。

魚だ。

うん、玄関の水槽の中にいたはずの金魚が巨大化し、朝美の代わりに素麺をすすっている。なかなかグロテスクってかお母さん！朝美は！？私の驚きに気づいたのか、金魚はすっとヒレを口元にもっていく。黙ってろってことか。私が了解、とうなずくと満足気に再び素麺を食いだす。よく箸が使えるなと思っていたら落とした。気にせずつゆごと素麺を飲み干す。

お母さん気付け　！！

「母ちゃん、つゆとってぇな」

大阪弁！！お母さん気付け！！

「あら、薄かった？」

気付けよ！！

ははは、これは夢だ。なんて愉快な夢だろう。そうだ、寝直そう。

「ごちそうさま」

「ごっつぉさん」

一緒に食べ終わっちまったよ。
「朱美ぃ、ちょっと来いや」
とヒレ招きする金魚。なんか逆らえずについていく。金魚は私を玄関まで連れて行き、水槽をヒレ差す。
「朝美！！」
私と同じ顔の人間が縮小化されて、水草をベッドに眠っていた。
「おめぇ気付いたんやなぁ、わいと朝美が入れ替わっていること」
「朝美をどうする気！！」
かっこよくポーズをつけて聞いたが金魚はわっはっはっと笑った。
「なーんもせん、ただの生活の交換や。夏休みやからな」
なんか、こいつムカつく。
「今日からしばらくわいが姉貴やで。よろしゅう頼んまんわ」
ほんとにこいつはなんなんだ。

一週間。私は金魚を観察した。
朝は早起きだし、家事をこなし、ボランティアにも参加。近所への挨拶もさわやかにこなしているようだ。あと勉強もたくさんしている。くやしいことに私より頭がいい。そう、真面目だ。そうだ、これは朝美の毎年の夏休みだ。
逆に水槽の朝美は一日中水の中でほわほわとしている。こんな朝美は見たことがない。水中は冷たくて気持ちよさそうだ。かるく水温計で水をかき回すと驚いたようにくるくると泳ぎ、私を見た。
「いいのかぁ、貴重な夏休みが金魚に盗られているぞ～」
水の中に音は伝わらないようで、くりっと首をかしげられた。

一週間と一日目。
「朝美、朱美、ちょっと来て！」
お母さんは私らを呼び集め金魚にメモを渡す。それには文字がびっしり書かれてる。
「今日安いのよ！」

ああ、だから二人（一人と一匹）で買い物に行って来いってことね。金魚並んで買い物をする。なんか、なんか嫌だ。いや、百歩ゆずっていいとしても、こいつの性格が好きじゃないから嫌だ。
「朱美、置いて行くで」
ああ、はいはい、わかりましたぁ。
安売りの行われているスーパーへ向かって歩いていると、子供の集団とすれ違った。どうやら保育園のお散歩タイムのようだ。その中の三、四人が金魚を見て不思議そうな顔をしていた。
「…ばれてるよ」
「んあぁ、あんくらいのガキには見えるな。まさか高校生のおめぇに見えるとは思わへんかった」
私は幼稚園児と同じレベル？
「まぁ、おめぇの場合は‘力’みてえなもんがある。金魚掬いでわいを掬えるたぁ、何かしらの‘力’が必要やからな。まぁ、世話したんは朝美やけど」
そうだ、こいつは中学生のときに祭りで私が掬ってきたんだ。なんで捕っちゃったんだろう。あ、こいつが一番元気がよくてレアものだと思ったんだ。なんで捕っちゃったんだろう。そうすればこいつと並んで歩くことはなかったのに。
「ねぇ、どうして朝美と生活の交換したの？」
「そりゃあ、朝美に必要だったからや」
「朝美が金魚になる必要が？」
「ちょっとちゃうな、おめぇの姉貴には休む時間が必要だったんや」
わからん。夏休みだからごろごろし放題ではないか。ふぃーと金魚がため息をついた。
「朝美の性格、考えてみぃ」
真面目でなんにでも手を出し、その全てをやり遂げようとする頑張り屋。かな。
「人間はな、回遊魚やない。動き回らなきゃ呼吸ができずに死ぬ、なんてことはないんや。体も精神も、使いすぎれば壊れちまう。で

もな、朝美はもうそんな生活が染み込んでいて休むことを忘れたんや。自分でもあかん思ってっても頑張ってしまうんや。辛いで、ほんまに。せやからわいは朝美と生活の交換をしたんや。休むことを思い出させるためにな」

なんかいきなりかっこいいこと言いやがった…そうか、朝美は休めなかったのか。

「おめぇはもうちょっと動いた方がええな。肉付きすぎやないか？」

むにゅっと腕の無駄肉つかまれた。

「セクハラ！キモい！」

と思いっきり金魚の尾びれを蹴った。おふっ、と言って倒れた。ざまーみろ。野良猫が数匹、弱ったと思われる金魚にかぶりついた。

「痛いがな！痛いがな！」

ビチビチと暴れる巨大金魚。うーん、猫にも金魚に見えているのか。

「も、もうあかん」

あ、死んだ？　あ、死なれたら朝美は元に戻らないかも！それは気持ち悪い！と野良猫を追い払う。

「ほんなこつ、おなごはおそろしかばい」

えっ、九州弁？こいつ大阪魚じゃないんかい。ってかもともと悪いのそっちだろ、謝れよ。

買い物も終わり、お釣りで買ったアイスを食べながら帰る。

「やる。お姉さんからのプレゼントやで」

金魚は私に最中アイスの中身（バニラ）をベチョっと渡した。サクサク部分が好きなようだが、私にデロデロのアイスを渡すのはふざけている。

「誰がいるか！」

と、アイスを顔面にぶつけてやった。

次の日、金魚と朝美は元に戻っていた。

「おはよう、朱美」

偽大阪弁でも偽九州弁でもない、朝美だ。休んだおかげか、いつ

もより元気そうだった。
　そして金魚は、朝美的生活に疲れたのか動きがどことなく鈍かった。しかたないなぁ、と私は水槽に最中アイスのサクサクをひとつまみ、入れてやった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1568d/

金魚　１

2010年10月8日15時42分発行